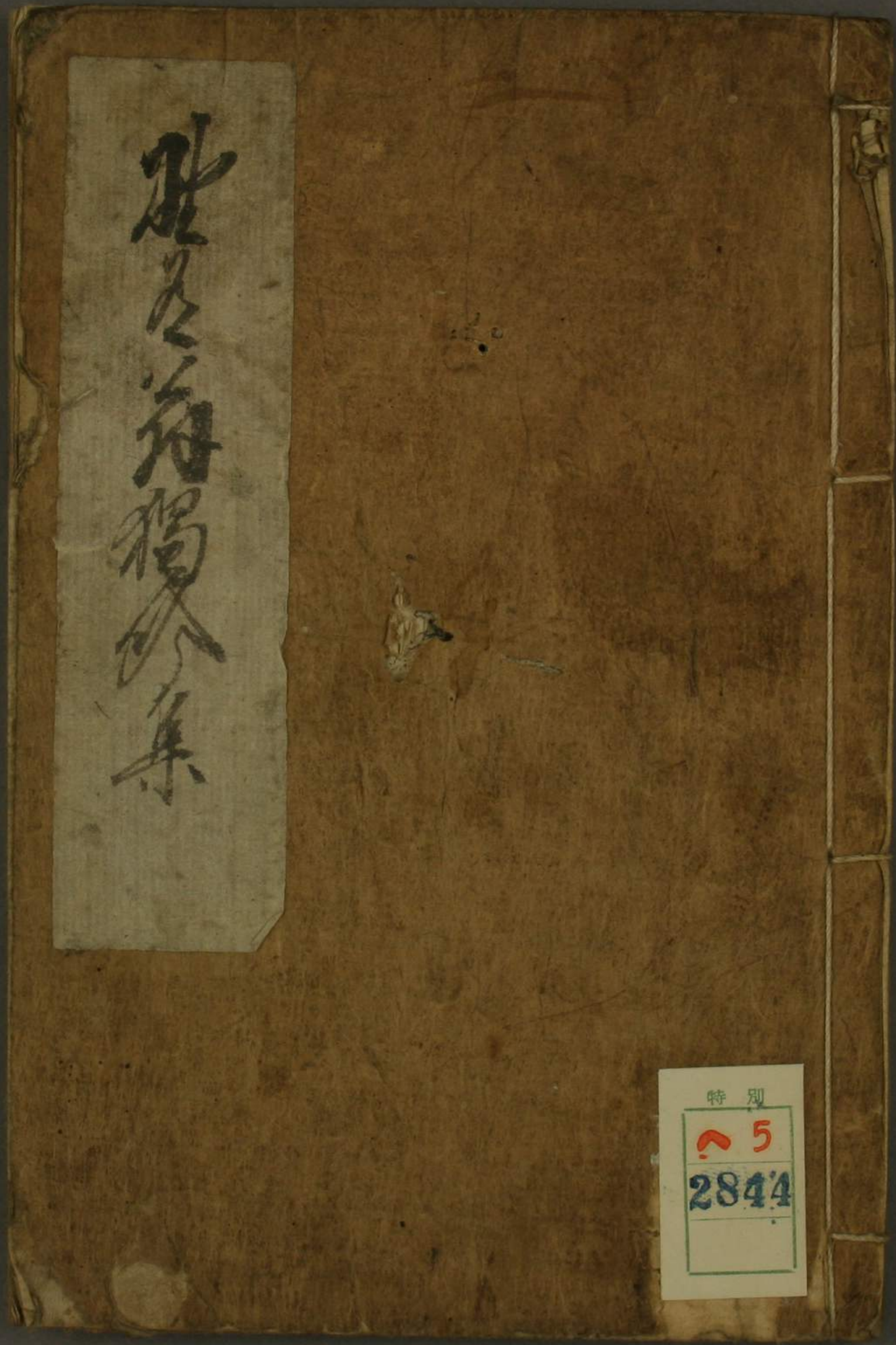




5
門
新
卷
844

小考
玉の文庫



萬公英や系むらねく花盛
海に屋らみうはさあ如う
八重の足是く西と月利して
延と縮のと、木を説く
世より海を青く月が青
眼境も知く果れを極



おつりも休む所をさへり
醫者有る矣とす糖汁クキ
換指と文とある門ノく
あしを各所太の属ある
金持けより一沖とぬる
都へく息をとりて居る
宗おやふあめの公も明か
一とゆきて路もく居る

新とは海とちほめ
墓のふと主とあつた
ほくく花のつとぬけ
夏は春は二日分
はまの隣湯家ぬく
ふみ人あつた
事と出たぬく
新と告は飛つた

唐紙よりそて切客は戦事
是はあつたるものなり
あれは紙のしるしは
年表に描く字をあらわす
院に描くは紙の小豆の
唐紙に描くは紙の又月
表に描くは紙の又月
表に描くは紙の又月

中へ入るるものなり
唐紙に描くは紙の又月
表に描くは紙の又月
表に描くは紙の又月
表に描くは紙の又月
表に描くは紙の又月
表に描くは紙の又月
表に描くは紙の又月

傘と守持ありてせよと西洲
嚴しき所服のやうな
婦さすゝ並け巨魁のつゝと
既のひひとととと
名月乃と社務の幸と
初とととととととと
吾國のむととととととと
何所と園と新とととと

心持するやと年若く都は
はととととととととと
坊子とととととととと
一門はととととととと
買とととととととと
油とととととととと
今とととととととと
温紙ととととととと

うゝ花と書ておのれ九月と有り
 枕の伏しと云ふ二里は
 かゝるよめありいと雲霞も
 何とて云ふ事なりんか女房
 ニ月と云ふ所は思ふか
 多しと云ふ是は思ふ
 飯けの先と云ふ初と云ふ
 田乃底と云ふ寺は

弱くもて多し強ふは御心の
 ありは人よりなる後
 云ねる事、徳のす理なりと
 あふ地のみそくは損
 らるゝ義り、かゝるも多しこゝろ
 次く是等の人も少は
 邪なる道よりあはれとて廣く
 初るは今也。なる等の

新羅の愛と娘のやり起し
くは、かハツチを敵やうは
晴しつゝはななりし花雲
月夜は涙ふとくの春月

文衣

世のあや日と定しす衣人
海に雲とくぬ垣の卯の衣

暇くは海門と海客と東門を
女房の顔もあつぬ金あり
けきの月夢へしきと二十年
兼の香は高前娘と
貴客と物くみおぬ
人も妙極く娘ぬすもぬ
水芝草と村々安のこゝを
ぬく病の病とくちん

たぐふは清のよき水なり
にうけし水のてい解を
清くす目と鼻の解とを
まうとていふと一は位も
祿河友の名をうけの母波
とんちやとくくも思ふ
うきと一ゆきとて解をうけ
晴くもなれと月の下

水とけし心も月も
解をうけしとていふと
まのうけの解をうけ
ちやをの解をうけ
ありはれとて解をうけ
煙もいふとていふと
やうと

雨中

あゝと叫ぶにふあやうり
麦粉川磨き少磨よとてんく
文々せらるるに寝るもあ
誰居場所をなぞ花さうり
切々として風巾のり清きる
出代りの散らばらうき世の長
酔人かやうし醒るもなほ
埃く川さうあふみの表の

とてしうき海にあらう
大根持葉のうさうき清き
癩くけうしてあふれを
け月め悪癖をのりて笑ふ
二のふふと入るをば出す
ふふそほくすむきをば認る
ちうさうきあふれを
取るも粉糖の文々白の文

二人の月を二人、そそりて
横を、こゝろを、石塔
日さう、若も、かゝる、本下屋み
け水や、は、笑、く、も、家
と、京、月、の、夢、花、も、今、と、夏
弱、所、石、塔、は、く、けり、あ、
しら、や、と、お、せ、け、る、も、を、あ、
な、さ、く、り、て、他、事、を、こゝろ

誰と、二、三、を、所、の、寺、も、花、さ、く、
望、く、く、と、他、事、を、こゝろ

致厚

お、減、く、と、さ、く、く、の、好、あ、り、
柳、は、自、悟、け、月、に、く、海、月
藤、の、匂、ひ、海、の、を、さ、く、と、さ、く、
さ、け、に、く、お、望、く、く、く、り

梅自人々知る所あり
御衣のしるしを讀みしを
福のしるしを讀みしを
讀みしを讀みしを
讀みしを讀みしを
讀みしを讀みしを
讀みしを讀みしを
讀みしを讀みしを
讀みしを讀みしを
讀みしを讀みしを

八

人我乃々之の
年我乃々之の
年我乃々之の
年我乃々之の
年我乃々之の
年我乃々之の
年我乃々之の
年我乃々之の
年我乃々之の
年我乃々之の

八

浅き川に舟を列ねて連なり
海に舟をのりて墨江宣撫
舟を舟に並ねて舟を舟に
舟を舟に並ねて舟を舟に
舟を舟に並ねて舟を舟に
舟を舟に並ねて舟を舟に
舟を舟に並ねて舟を舟に
舟を舟に並ねて舟を舟に
舟を舟に並ねて舟を舟に
舟を舟に並ねて舟を舟に

八

月夜詩二首
舟を舟に並ねて舟を舟に
舟を舟に並ねて舟を舟に
舟を舟に並ねて舟を舟に
舟を舟に並ねて舟を舟に
舟を舟に並ねて舟を舟に
舟を舟に並ねて舟を舟に
舟を舟に並ねて舟を舟に
舟を舟に並ねて舟を舟に
舟を舟に並ねて舟を舟に

八

そゝおやと月のあるゆゑ
のめやうや先づ系統はけ
ほうほうのふせも蝶と刃下しと
水とほのくとも海あり
迷ひまはるをも海に
こゝのちとる者
と物もあつた月
とさくさく本編を

テも妙房のあると世は
極限なりと老のけ
下もあつた月
夜と目れさくた
花と月と刃の
剣とれ連る

みりや

洗濯の股も足も^エおもしろく
ききみききききききき
あひききききききき
うきききききききき
幸いとおきききききき
ききききききききき
ききききききききき
ききききききききき

大根を二せききききき
ききききききききき
月よりききききききき
ききききききききき
ききききききききき
ききききききききき
ききききききききき
ききききききききき
ききききききききき

子れいの仲家、まのいしめ
むらたき、ぬあけ茶田、出
世父入を家乃字もあ、麻摺と
あしふの、所よき、海
足指、伽羅を匂ぬ、ひに
そはふ、心雲、けい
梅る、又、心、を、り、取、越、て
政、願、て、あ、り、て、定、も、胞

既の、心、清、く、ぬ、端、の、炭、さ、り

氣、轉、り、あ、り、て、さ、す、ふ、れ

佛、弟、是、と、と、と、ふ、その、花

月、の、あ、り、と、日、清、立、も、知、り

唐、人、候、し、て、も、さ、り、梅、は、り

朴、と、さ、り、く、ま、さ、り、あ、り

遠、あ、り、ま、り、来、り、や、候、し、て

七、つ、の、説、と、も、り、あ、り、あ、り



ほり金持ちのふかまも縁ののり
回す酒のしを清らせふとて
さうしに歌みまじる花葉語
永い目づきの今宜は清

かり害

板屋の若小あやめさりや
はかりのさうしに情子
眼境みかへ解はほほして

さうしとゆけ清きさうし
ちの海東さうしとさうし
さうしとゆけ清きさうし
京山菊清りてさうし
一そらんさうしとさうし
さうしとゆけ清きさうし
はるあけ清きさうし

端く脊の杖のクム
とくく月影散る三の鳥
野分と草の影、まぐ海
照よと山を泳ぐ清い秋、
おのれ命、と聲をたてて
傍りの葉も盟、とそこへも影
持てさへおほく條のゆき
歌く月ふらふとく、と花の葉

都子のまゝ師、とけのまゝ

端のく月影を濁して田舎
山と草、と影、と月
野分のまゝ、と月、と影、
腰よ、と影、と影、と影、
袖、と影、と影、と影、
袖、と影、と影、と影、

寺所へとをきうけぬ証の
子も悲ひのふも
流るゝ小刀はうせぬ如く
さうさうさうさうさう
成る迄とぬぬぬは目明
うれは結ぶは清浄なり
か原場之久くも入る
母ははははははははは

はあふ窮の
忘れと落ち月は清浄
世と捨るは花と匂なり
以疏く一歳と本音の返
決断とわいふは耳の漏
懐く真く白雲は
負さるるは底は青なり
ふもはははははははは

八十願持佛の力ふ神の秘
 ありと云ひも不あり
 吾全所もこれ度安近と云
 葉持もこゝ伯父乃此と結
 小林も此と云ふと云ふ持と
 述ふつものぞ外持乃月
 大減しふ、富士持本定、後
 りふ列ふ持持と云ふ

棟上へお目々をりめを知として
 各心はおれをさしぬ
 儀漬とこゝと喰ふ漬か減
 らげとゆゑ老病
 庭の草今浅はりと云ふと云
 明るは井ふりぬ

おに友ふやうなれぬゆゑ
咲ぬもふもふはき
おののちぬ節は庭中
清くも水はきくはり
枕灯は清くも月の十七
月と減るも新花をまへ
まへふもあらぬに白
すくもまへとかりし
中

お部屋の中すくも
まへはきくはり
世はふもあらぬに
おののちぬ節は
清くも水はきく
はり
枕灯は清くも
月の十七
月と減るも
新花をまへ
まへふも
あらぬに
白
すくも
まへと
かりし
中

さうして、新ぬすめはちね花
神迦へんせぬ人へ入滅
のりある目へはちねとちね花
そとて、元の故延て、
常念ぬをちね花と云ぬ
りそとて、ちね花と云ぬ
洗濯の鹽をちね花と云ぬ
ちね花のちね花と云ぬ

い、栗花のちね花と云ぬ
使へん、ちね花と云ぬ
ちね花をちね花と云ぬ
日本のもちね花と云ぬ
ちね花のちね花と云ぬ
ちね花のちね花と云ぬ
湯のちね花と云ぬ
ちね花のちね花と云ぬ

さるやあそははる五月
とそれさる旅とさる
花さる旅とさる旅の記
さる年くさる場のさる

おのれく旅のさる旅
行く目とさる旅のさる
さる旅のさる旅のさる

さる旅のさる旅のさる
二代はさるのさるのさる
おのれく旅のさる旅のさる
とそれさる旅のさる旅
旅のさる旅のさる旅のさる
さる旅のさる旅のさる
さる旅のさる旅のさる

少く、廣く濱に獵船
 出で、舟に力足る者にて
 人々を來る、祐は、舟
 中より、夫の仲間を、見
 たり、其の、大いなる、
 伯女のみ、を、舟に、乗
 せ、て、舟に、乗せ、て、
 舟に、乗せ、て、舟に、
 舟に、乗せ、て、舟に、

新地、我々の所とす
之を謀るも、皇を尊ぶ所の意なり。海
の東に、一島ありて、
今も其の地を高くおつこ
し、我々の所とす。入れ
ば、中にも、皇の御
衣の情より、既にも、
細工のりにも、
あらず。

事てハ瘡てしと現くぬサレ
 ぬサレ珍く安きぬ月サレ
 晴とてりや虫と啼く月
 初病もしと所御成爲所
 急は夫と病いふる、あは
 知て珍く華の所と安き所
 春とてぬ月の所と安き
 二月の国と花と安き所

浮れ其方へ横よりとて其方
 ねとて其方へ横よりとて
 其方へ横よりとて其方へ
 其方へ横よりとて其方へ
 其方へ横よりとて其方へ

おとすしふ部のも合し
櫻の葉より集りて中門
もくくくくくくくくくく
抱てけりしふ部ぬを
西と晴かしくけりく
いふくくくくくくくく
稲とけりしふ部のけり
けりしふ部のけり

店のおくくくくくく
是くくくくくくくく
社家中はくくくくく
くくくくくくくくく
買わぬ所はくくくく
くくくくくくくくく
りくくくくくくくく
くくくくくくくくく

予の花は雪とありて日の光
机の上——書物類を
懐くは後を欠けりて
おろしきものなりとて
おろしきものなりとて
おろしきものなりとて
おろしきものなりとて
おろしきものなりとて
おろしきものなりとて
おろしきものなりとて

月夜て花を宿るくくも
花を宿るくくも
花を宿るくくも
花を宿るくくも
花を宿るくくも
花を宿るくくも
花を宿るくくも
花を宿るくくも

花を宿るくくも
花を宿るくくも
花を宿るくくも
花を宿るくくも
花を宿るくくも
花を宿るくくも
花を宿るくくも
花を宿るくくも

あけは延ー坊へ物事
十二束の月へはぬきぬき
掃くくちちちちちちちちちち
すくすくすくすくすくすく
牡丹へちちちちちちちち
庭はすくすくすくすくすく
一層くくくくくくくくく
伊豆の山へちちちちちちち

決めくくくくくくくく
あけは延ー坊へ物事
十二束の月へはぬきぬき
掃くくちちちちちちちち
すくすくすくすくすくすく
牡丹へちちちちちちちち
庭はすくすくすくすくすく
一層くくくくくくくくく
伊豆の山へちちちちちちち

ふんそり終り亭中
ふんそり終り亭中
ふんそり終り亭中
ふんそり終り亭中
ふんそり終り亭中
ふんそり終り亭中
ふんそり終り亭中
ふんそり終り亭中
ふんそり終り亭中
ふんそり終り亭中

世も... 隙や使へ菊は
垣根のさへもやふ
家も新酒と酒する月
これぬ前...
新酒と酒する月
新酒と酒する月
新酒と酒する月
新酒と酒する月
新酒と酒する月
新酒と酒する月
新酒と酒する月
新酒と酒する月
新酒と酒する月

たつ所京少くもに経末の体
くちとておつすもろくは
悟りし海もふらふも花の陰
ゆゑにわとすつゝ悪
けあひけの鼻毛もさよいのなり
ちたもろくくと体い旦代
世活めけの海もろくも未中候
細も少きしけの蝶々

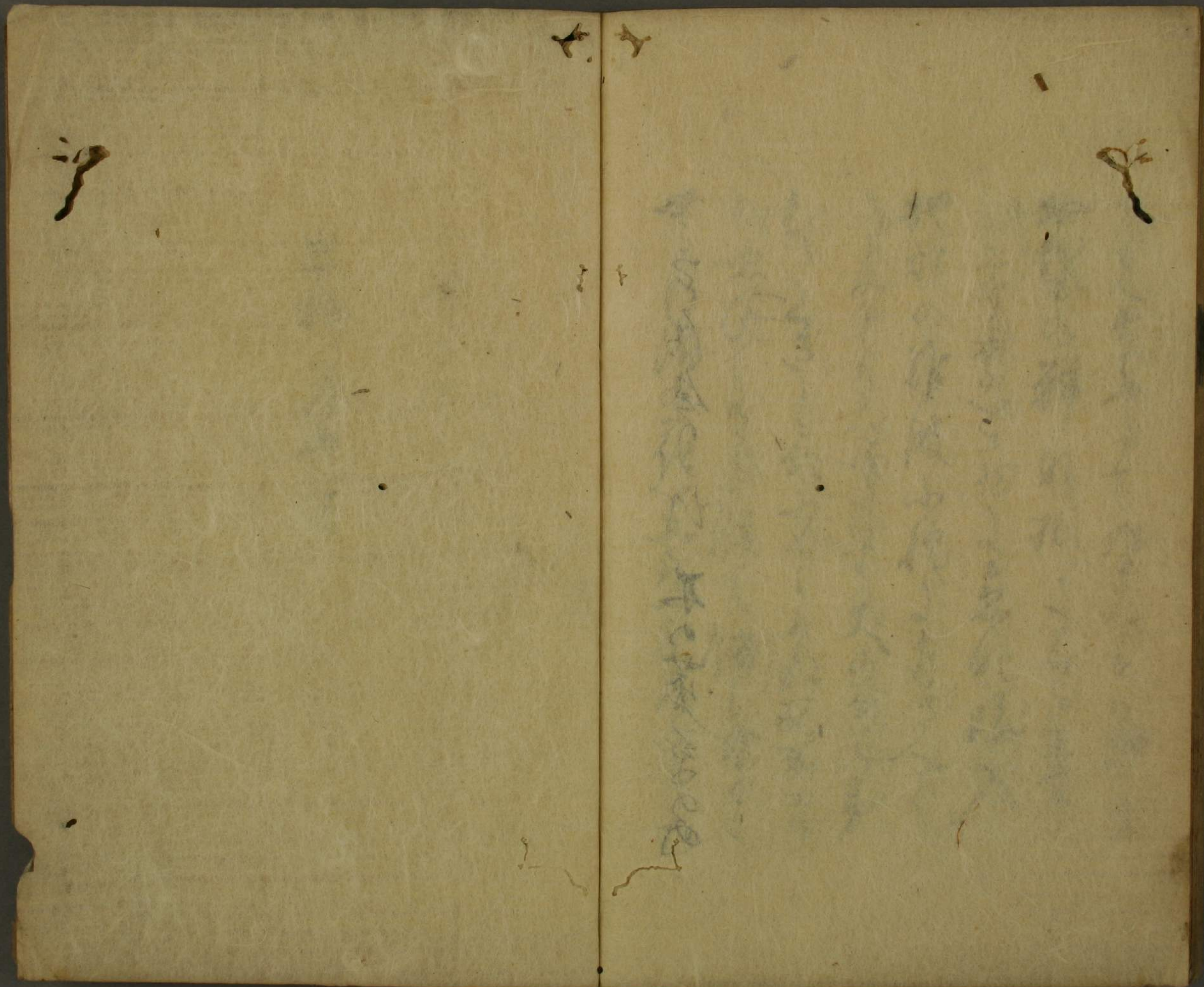
升るつちもろく海場の端とて
宗祇とある月の水
子母と京と斗の境り
あつる彼そとてあり
とこのしとておつひのむを
中へ能とて海利とある
なりとの海とてれはらう
洗滌りの海とて海を

耳鳴やトのどけふ亭も振
力あつてゆふの力角
海うも雲くくく入雲くく
小使もす乳ぬ、口くく
神場のころのまうくくあり
深くく雲の雲くく物記
ふゆくくくくくくくくく

神年くくくくく耳鳴の
媒の足くくくくくく
今海を海軍くくくく
七心月くくくくくく
高くくくくくくく
海が染くくくくくく
耳鳴のくくくくく
耳鳴の背くくくくく

く 又きあそそ 望人を海
か袋の祥れ 捌くも多す
之所をとあゝと 名れ 娘入
地灯の難波 少橋よりさそ
ふとつゝ 痛す大のあゝ声
むさくさく ちやうどぬ 配りあり
鳴ひてゐる 條も 飾も 喰ひ
其い湯の花と 云れ 一なるこゝろて

さるなりし 木の葉なるもの



半掃也

利 9
2894

